

小田原史談

第 16 号

談会 小田原史談会
発行所 小田原市幸一丁内
小田原市文化館
郷土文庫

真説曾我兄弟 (三)

中野 敬次郎

四、数多き曾我五郎の赦免状

曾我兄弟と赤穂浪士の仇討が、多くの仇討物語の中で最も人気を博している一つの原因は、苦心惨胆の末無事に本懐を遂げるが、仇を討った後で、自分達も哀れその生命を失ってしまうことが人々の深い同情を引くからであるらしい。殊に曾我兄弟の場合、仇討達成の直後に、兄は乱斗の中に斬られ、弟は捕えられて梟首せられて、二十二才と二十才という花も盛りの若さで非業の最後を遂げてしまうのであるから、そこに無限の憐愍の情をそそり、測々たる哀愁を感じさせるものがある。

十郎祐成は仁田四郎忠常に斬られたのであるから仕方がないが、五郎時致は仇討の夜に捕縛せられて一応その日は生命が助かっているから死刑になったのではなく、赦されて生命を全うしたのであるというように考えたい気持ちが生ずるのでそれがやがて曾我五郎の赦免状というものの形であらわれて来るのである。

五郎を赦したい気持は頼朝自身にも大いにあったが、工藤祐経の子息大房丸の泣訴によって止むなく梟首に処したことは、その条を「吾妻鏡」に「五郎殊ニ勇士タルノ間、宥サル可キカノ旨、内々御猶予有リト雖モ、祐経ノ息童泣イテ愁ヒ申スニ依テ五郎ヲ互サル」と述べておいて、同書は鎌倉幕府の編纂した日記体記録であるとは言えないが、兄弟に対する同情的気分が各条の文外ににじみ出ているが、これは恐らく當時の鎌倉武士の感情が反映されたものと思われる。

下って「曾我物語」の時代になると、五郎の死刑は認めているが、この処置に対する鬱憤を直接斬首に当たった人物に向けてぶちまけている。「曾我物語」の五郎最後のくだりは次のような話になっている。

頼朝の命をうけて大見小平次実政が五郎の処断をすることになったが、祐経の息子大房丸が親の敵だから、せめて私の手で成敗したいと、泣く泣く乞うて止まぬので、さらばと大房丸の郎党に引き渡したが、郎党どもは五郎を松が崎という処につれて行った。ところが、この勇士の姿を見ようというので、四方から見物に集まる者は雲霞の如くであった。大房丸が郎党の平四郎と言う者に、お前が首を斬れと命ずると「私はかつて曾我の館に仕えて、この腰を五つ六つ頃まで育て上げた者ですから、日頃の情忘れがたく、到底刃は向けられませんから、余人に命令して下さい」と、律義の平四郎は固辞して受けないが、筑紫中太として、工藤祐経に縋って本領取り戻しを訴えていた男が、自ら進み出て斬り役を買って出た。腹黒い中太は、態と鈍刀で五郎の首をごしごし摺り斬ったので、この有様を見た人々が、あな無惨やと異口同音に念仏を唱えた。

しかし、勇猛無双の五郎は顔もしがめず、苦痛も叫ばず、泰然として無道の刃を受けつつ五月二十九日の午の刻に富士の裾野の露と消えたのである。

源頼朝は中太の振舞をきいて赫と怒り、誰かその鈍刀をもって中太の首も摺り斬れとのしつたので、これを伝え聞いた中太は仰天して、そのまま風を喰って遁逃したが、郷里の筑紫に逃げ帰ってからは、夜な夜な悪夢に悩まされて、終に狂死するに至ったので、これぞ天罰のむくいであると人々胸のすく思いであった。

「曾我物語」の伝える曾我五郎最後の場面は、以上のような筋の話になっているのであるが、恐らくこんな話は、本当のことではあるまい。曾我兄弟に対する同情が、五郎梟首の憤懣の感情が高まって、それを吐瀉したものののだろう。

ところが、これが江戸時代になって、曾我兄弟の物語が、浄瑠璃に、歌舞伎に、謡曲に、あらゆるものに取上げられて大衆の人気を博するようになると、五郎は死刑になったのでなく、赦されて後世を全うしたのであると信じたいところまで気持ちが發達して行った。そこに五郎の赦免状の出現が見られるのである。曾我五郎の赦免状を所蔵するところについて、その代表的なものを記すると大体二つの型式があるようだが先づ曾我兄弟の成育した曾我の里の曾我家代々の菩提寺である城前寺のものがその一つの型を代表するものである。その文面は、

「魯筆。曾我五郎時致、依將軍憐愍、助命彼成候、謹而是可請給候。五月廿九日。和田、三浦、太郎祐信との」

とあって、和田義盛、三浦義澄の両名より曾我太郎祐信に宛てた型で、將軍頼朝の憐愍によって五郎の一命を免助することを伝えた文面となっておる。

曾我十郎の身代り石というもののあるので知られている大磯町の宮経山延命寺に所蔵している五郎赦免状は全く城前寺のものと同じのものであって、どちらの寺に先に出来て、どちらの寺が後に做ったものかわからないが、文字、文面まことしやかに出来ていて愛すべき「五郎の赦し状」と言うべきである。

今一つの型の代表は、箱根湯本町台の茶屋にある正眼寺と静岡県駿東郡藤岡の曾我八幡宮に所蔵するもので、相当の長文でなかなか念が入って作られている。これは頼朝より曾我五郎に与えた形になっておいて、正眼寺のものは「建久四年五月廿八日。頼朝。曾我五郎殿」とあり、曾我八幡宮のものは、

「五月廿九日。頼朝。曾我五郎どのへ」とあって、その日付、署名にも内容にも一二点相違するところがあるが、大略同文で出所が一つであることがわかる。文中の最後は

「一天四海のうちに比類なき剛の者故、今後は頼朝に忠信を致せ。本領として宇佐美・葛見・河津の三ヶ庄を知りて与え、永代に安堵させるものである」ということを述べておいて、これは念の入った滑稽な「五郎の赦し状」と言うべきである。

これらの外にも、曾我兄弟に縁故のある神社には、この種の赦免状を宝物として所蔵するところが多いが、その元の出所は同じであっても、筆跡が違い、文面の一部が違い、日付が違うなど、思い思いに作成されているのは、何れもそれが、各地の民衆の手によってできたものであることを示しておいて、江戸時代における曾我兄弟の大衆性と庶民の感情と人気の反映として興味も沸くのであって単に滑稽なりと一笑に付し難いようにも思われる。

しかし、今では「この赦免状が到着する寸前に、五郎が斬首せられてしまっていたと言うことです。洵に無念な次第でありました」と来観者に苦しい説明をしているところもあるらしい。

五、曾我兄弟は五人兄弟

曾我兄弟の生れたのは、兄は承安二年(一一七二)で、弟は承安四年(一一七四)であった。誕生地は、当時の河津の庄今の伊豆東海岸の河津温泉下河津である。

兄弟の母は万劫御前(満江御前)と言って、伊豆狩野の庄の領主で剛勇の誇れ高かった狩野大介茂光の子狩野四郎親光の娘であった。

その頃、源三位頼政の嫡子仲綱の乳母子に源左衛門尉仲成という人物があって、伊豆守であった仲綱の国司代として伊豆に下っておいたが、万劫御前は最初この左衛門尉仲成と結婚して、一男一女を挙げたのであるが、男子は名を信俊と言って、父が京都の出身であったので、これにあやかっか、長して後は、京ノ小次郎信俊と名乗った。また母が父に従って一時上落したことがあって、その在京中に誕生したので京ノ小次郎を称したのであるとも言う。

女子の方は後に相模国二宮郷の領主二宮太郎朝忠の夫人となった女性である。ところが、やがて左衛門尉仲成の国司代の任期が終ったので、妻子を携えて帰京しようとした際に、折悪しく万劫御前の母が病の床に伏しておいたのと、祖父の狩野大介が、この孫娘を愛撫する余り、手元を離すことを好まず、固く留めて置らなかつたので、

仲成は独り京に上り、母子は伊豆に残されて、遂に生き別れの状態になってしまった。そして、仲成とあかぬ離別した後、やがて伊東祐親の嫡男で、河津の庄の地頭河津三郎祐泰のところに再婚したが、ここで生んだのが十郎・五郎の兄弟であった。十郎は幼名を一丸丸と言ひ、五郎は箱王丸と呼ばれたのである。ところが、安元二年(一一七六)十月十日の伊豆の奥野の狩野のあと、赤沢山麓八幡野において、河津祐泰が工藤祐経の家臣大見小藤太成家、八幡三郎行氏の人射殺されて非業の最後を遂げたので、またも無惨な次第で寡婦となった。

しかも、悲しい哉、この時亡夫祐泰の子供を胎中に宿しておいて、その喪中に一人の男子を生んだのである。「吾妻鏡」には祐泰没後五日にして誕生したと言ひ、「異本曾我物語」では三十五日とあり「曾我物語」では五十日目に生れたと記しておるが何れにしても誕生の時から因果を背負った子であつて、これが十郎・五郎の哀しき実弟である。

この子は実父の喪中に誕生したと言ひ因縁の者であるので、現世の縁も薄からうとことから、一族の中には、如何なる野山にでも捨てるがよいと言ひ意見さえも出た程であったが、伊東祐親の次男で、河津祐泰の弟に当る伊東九郎祐清という人は慈悲の深い高操の者であつたので、その妻が養うて我が子として兄の形見にせんと申し出して引き取り、名を御房丸とつけて大切に育てたのである。ところが、その後、伊東祐清が平家に属して上落し、北陸道の篠原の戦に討死したので、祐清の妻が、平賀武蔵守義信に再嫁したとき、御房丸もそのもとに引きとられて、武蔵の国府に移り住んだが、家庭内のいろいろ都合で、立ち場が悪かつたのであろうか、いつしか平賀家を去って落飾して僧侶となり、名を律師房と改めて諸国の寺々を転々としたのである薄命の男であつた。

さて、曾我兄弟の母は三度嫁して相模国曾我郷の地頭曾我太郎祐信の夫人となつて十郎・五郎の二児をつれて、伊豆の河津の里から相模の曾我の里に移ることになつたそれは先夫河津祐泰が安元二年十月十日に非業の最後を遂げてから、日なお浅いその年の暮れであつた。曾我兄弟が曾我の里、今の小田原市下曾我に住むようになったのは、この時からである。一丸丸は五才、箱王丸は三才であつた。

妻は夫を替へることほど不幸はなく、子は親を替へるほど不幸はないと言ひ、曾我兄弟の母は三度夫を替へ、二児も父親を替へた。

しかも、夫があのような非業の最後をとけて、いまだその悲しみの涙の干きぬ間と思ふのに、こんなに早くまたも再嫁するに至つたのは何故であるかと言ひ、亡夫の父伊東入道祐親の強い勧めに従つたもので、万劫御前がひたすら愁ひに沈み、夫の百ヶ日が来たら出家して尼にならうと決心し、袈裟よ法衣よと用意をしてゐるのを聞いて「まことや、姿を變へんとし給うると聞く、子供を誰に預けて言てめとして、左様の事を思い立ち給うぞ。おとろえたる祖父や姥をたのみ給うかや、それ更にならう

べからず。三郎がなければとて、幼き者どもあまた侍れど、つゆおろそかに思い奉らず、ひとえに祐泰が形見とこそ思い奉れ。いかなる有様にても、身をよさで幼い者を育て、人となし給え」(流布本曾我物語)と言ひ、また

「相模国の住人曾我太郎祐信と申すは、入道が為にも姉の子なれば甥なり。狩野前大介殿の御孫なれば、御身の為にも又従弟なり。折節女房に後れ候えは、この宿所へ入れまいらせんと存するなり。御嘆をも慰め、幼きものどもそだて給え。かの祐信は御身にも一家といひ、よもや幼きものどもに疏略は候まじ」(異本曾我物語)

と説いて再縁させたのである。

曾我太郎祐信は平良文の子孫であるが千葉流平氏で、良文八世の孫曾我大夫祐家の子で、曾我郷の地頭であった。曾我郷は曾我の庄とも曾我の里とも言われ、後の曾我谷津村、曾我原村、曾我岸村、曾我別所村、上曾我村の五村の合庄を指すのである。祐信の父祐家は狩野大介茂光の娘と婚して祐信を生んだので、祐信と万劫御前は、ともに狩野大介の孫に当り、互に又従弟の濃い縁籍に當っていたし、祐信がまたその頃は、先妻を亡くして不便を感じておったので、ここならば、決して母子を疏略にすることはあるまいと言ふことで、その勧めに従って再縁することになったのであった。この時の万劫御前の年令は明かでないが、河津三郎祐泰が非業の最後を遂げたのが三十一才であったから、その妻たる人の年令は、それより数年は若い筈で、二十六、七才であったであろうが、容色の勝れた婦人であつたらうと思われることは、狩野大介の孫娘として土地の武家に嫁ぐべき筈が、京都から下つた国司代の人となつたのは、その懇望によるものと察せられるし、その後には子持ちの未亡人でありながら、二回も三回も名家に嫁入りするところを見ると、祐泰の場合も、祐信の場合も、他の事情もあつたであろうが結局男子の方からの懇望があつたからであるようだ。

曾我太郎祐信には先妻の子供に小太郎祐綱と外に二人の男子があつたが、万劫御前は曾我家に入つてからは、子供を生まなかつた。従つて、曾我兄弟は同腹の兄弟が五人であつた。

六、不運の生涯を送つた母とその子達

曾我兄弟は同腹五人兄弟であつて、そのうち異父の兄一人、姉一人あつて、同父の弟二人あることは前に述べた通りであるが、男兄弟は皆不運な一生を終え、姉一人だけが無事の生涯を送つたのである。

この姉は、十郎・五郎の母が最初の夫である伊豆の国司代源左衛門尉仲成のもとで生んだ子であるが、長じて二宮太郎朝忠夫人となつた。相模平氏の雄中村正司平宗平(神奈川県中郡橋町)の四男友平は二宮四郎と称して始めて二宮の庄(神奈川県二宮町)の地頭となつて一家を興したが、その子が太郎朝忠で、二宮の庄内の中谷と称するところに居館を構え、頼朝に仕えて活動したが、兄弟の姉はこの領主の夫人として

平和な歳月を送つたのであるが、二宮の庄は霜見または志保見の郷とも言われたので、「曾我物語」には二宮の姉御前、波美の姉御前などとして現われ、兄弟が仇工藤祐経をねらつて曾我・鎌倉の間を往来する際に、しばしば、この姉を訪ねている。今もこの地に浄土宗の一寺撫海山知足寺というのがあるが、二宮氏の菩提寺であつて、朝忠夫人が晩年剃髪して花月院と号し、亡父並に富士岳麓に薨れた二弟の冥福を祈るために仏堂を建立したところで、兄弟の遺髪を埋葬したと伝える墓がある。兄弟の今一人の異父兄京小次郎信俊は、「吾妻鏡」の建久四年八月廿日の条に

「廿日、甲寅、故曾我十郎祐成ノ一腹ノ兄弟京ノ小次郎誅セラル。參州ニ縁座ス云々」とあつて、これは將軍頼朝の弟三河守範頼が將軍家に謀叛のことがあるとして滅されたとき、これに組したというので誅殺されたのであつた。この人は、父系の源氏も名乗らず、母系の狩野氏も称せず、独り京ノ小次郎と呼んでいる点や、曾我兄弟が永い年月、復讐のために辛苦の行動を続けたとき、多数の縁故の人々を頼んで援助を受けているが、京ノ小次郎との間には、一回十郎、五郎の協力を依頼したが拒絶したので、その後全然交渉のないところを見ると、この人は一族縁者に対しては不満があつて、とく孤独的な行動を執つていたらしく、その結果が、このような事件に組することになつたのであろう。それ故、

「同じ死ぬならば、五月に兄弟と一語に死んだならば、如何ばかり勇ましかつたであらう。由なきことに一命をおとしたものだと、聞く人みな指弾した」と言ふことである。

さて、最も哀れであつたのは、兄弟の末弟の御房丸の最後であつた。

喪中の誕生という因果を背負つて生れてきたこの子は本當に不幸な運命にさいなまれた。僧侶となつて律師房と名乗つたところまでは前回に述べたのであるが、曾我兄弟の仇討の直後に、故工藤祐経の妻子から、十郎・五郎には今一人の実弟がある筈だから兄達と同様の処置をしてほしいと頼朝に稟訴したので、捨てておけず、果して兄達の仇討計画に参加していたか否かを問ひ正す必要があるとのことで、使者を平賀武藏守義信のもとに遣はして仔細を訊問したところが、義信は仰せを承つて、早速探し出して召しつれて参上仕りますと返答した。

律師房は剃髪して武州の僧湛実の弟子となつて実永と称した。そして仇討事件の起きたときは、十八才で律師房、または伊東禪師と呼ばれて、遙かに越後国蒲原郡久我第山の国上というところにある国上寺という奥山の寺に修業中であつた。道程の隔て遠くて日数を重ねて建久四年七月一日の夕方、漸やく鎌倉につき甘繩(今の大船)の安達藤九郎の宅に入った。ところが噂に誰言うともなく、曾我兄弟の弟が召し出されて梟首せられるというのを聞いて、兄達は仇を討つて二人とも華々しく死んだが、自分分は遠隔の山奥にいたために一語に死ぬことの出来なかつたのは無念である。鎌倉殿の御前に召されて梟首されて恥を受けるよりは、潔く自害して弥陀の世界で兄達に

面会せんと決心して、翌七月二日仏暎にその近くの寺の持仏堂に入って静かに読経して仏を念じ、やがて庭前において守刀を持って自刃し果てたのである。

掘原景時から律師房自殺の報告を聞いて頼朝が大いにこれを惜んだことは、「吾妻鏡」に

「將軍家太々侮敷セラレ給フ。本ヨリ、コレヲ誅ス可キノ志ニ非ズ。只兄ト同意セシカ否カラ召シ問ハルル許リ也云々」と記している。

それについても一入哀れを感じるのには、兄弟の母万劫御前の生涯であった。

第一の結婚には生木を割かれるような離別をして、夫は妻子を残して遠く都の空に帰って行ったし、第二の夫は悪徒におそわれて非業の後を遂げたのである。そしてその遺児を抱いて第三の夫にまみえた。妻として夫を替える悲しみをどんなにか深く味ったことであろう。

しかも、子供達が次々と母に先って悲憤の短い生涯を遂げて去って行ったのである。殊に建久四年という年は、この不幸な母の最大の悲しい年であった。

同年五月二十八日、富士岳麓の仇討の際、十郎は乱斗のうちに剣刃に斃れ、翌二十九日に五郎は斬首に置った。越えて七月二日に律師房が自害して果て、八月二十日には京ノ小次郎が誅戮を受けおり、僅か三ヶ月に満たぬ間に四人の実子を非業に失っている。この母は言語に絶する苦悩と悲愁を幾度経験したのであるか。

やがて十郎・五郎兄弟の三周忌がめぐり来たとき、万劫御前は髪を削って尼となり、兄弟の菩提のために建てた曾我の大御堂に引籠った曾我太郎祐信もまた世を果敢なみ、髪を切って入道してひたすら仏に仕えることになった。

年移って正治元年(一一九九)遂に万劫御前が大往生の素懷を遂げた。日は奇縁にも富士巻符の仇討と同日の五月二十八日であった。

夫の祐信もその翌年の正治二年七月一日に没した。

七、曾我兄弟の背後にある人々

曾我兄弟の元服は兄の一万は十五才のとき、文治二年(一一八六)正月月中旬で、これより曾我十郎祐成と名乗り、弟の箱王は十七才の秋、建久元年(一一九〇)九月七日で、五郎時致と称した。兄が十郎で弟が五郎と言うのは何故かと思慮する向もあるが、これは次のような事情がある。祖父の伊東入道祐親は幼少にして実父を失った兄弟を深く憐憫するあまり、曾我氏の名儀を継がせるようになってからでも、彼等を我が子となぞらえておったが、殊に一万は嫡孫なれば、己れの実子の伊東九郎祐清(兄弟の実父祐泰の弟)の次の弟に準じておったので、元服のとき養父曾我祐信夫妻がこの精神を汲んで十郎祐成と名乗らせたものらしい。祐成という諱については、「春湊浪話」の中に、祐親の祐の字を与えられて称したものだと思像しているが、元来

伊東家と言ひ、曾我氏と言ひ、祐の名頭を用いることが通例となつておつて、十郎の祖父は祐親、実父は祐泰、養父は祐信であるので、あまり穿鑿するにも及ぶまいと思ふが、強いて言うならば、「曾我物語」の十郎元服の条に「まゝ父の名をとり曾我十郎とぞ名乗りける」とあるから、十郎は祖父の子の名儀をとり、祐成は養父の名を与えられたと考えるべきであろう。

弟の五郎は兄の元服と同時に十三才で箱根権現別当行実のもとに稚児として預けられ、行く行くは僧形となすべき父母の考えであったが、これをきらい、十七才の建久元年九月六日の剃髮予定の前夜、兄と示合せて密かに山を脱出して、翌七日兄弟相携えて鎌倉に行き、執権北条時政に頼って五郎の元服の烏帽子親を懇請したので、時政これを納れて、即日北条館で元服して五郎時致と名乗らせたのである。五郎の名は烏帽子親北条時政の子義時が江間小四郎と言われたので、その弟に準じて命名せられたものであった。時致は時政の時の一字を与えられたものであることは言うまでもない。ただ、この五郎の諱の時致については、本来は時宗と書くのであったではなかつたかと考えられるふしがある。時致と書いておられるのは「吾妻鏡」から初まるが、「異本曾我物語」や「流布本曾我物語」などには時宗と記しておられる。「ときむね」という呼名には時宗と書くのが順当であつて、時致はいささか無理なように思われる。

「吾妻鏡」は鎌倉中府の晩年に編纂された記録であるが、鎌倉時代の第一等資料には違ひないが、粉色も強弁もあつて必ずしも全部を文章通りの史実と認める訳にはゆかないし、特に執権北条家のことについては神経もくばつて書いておられる。鎌倉時代の後半に有名な執権北条時宗という人物が出現したので、事情はいかにもあれ梟首の刑にあつた曾我五郎の諱が、この名執権と同一であるというのを憚つた編者が、五郎の方の時致と書いたものでなからうか。「曾我物語」になると、時宗と書いてもそのような懸念をすることがない筈であつた。もし五郎の諱が本来が時致であるものなれば「吾妻鏡」より後に出来た曾我物語の諸本に時宗と書く必要はなかつたのではないだろうか。私の永い間の疑問なのである。

さてこの辺で、曾我兄弟の周囲をめぐる背後の力となつておられる人々のことを検討して見よう。先づ土肥実平とその一族についてのことである。

平良文の子孫と言われる相模平氏中村氏は、平安時代の末に今の神奈川県橋町中井村とに跨るところで、上中村、下中村の地、当時の中村の庄の庄司となつて、ここに土着して氏名を称したのである。中村庄司宗平の子に男子四人があつて、長男重平は中村太郎と称して父の後を継いだが、次男実平は土肥次郎と名乗つて、今の湯河原温泉当時の土肥郷の地頭となり、三男宗遠は土屋三郎と言つて今の平塚市土屋、当時の土屋の郷の地頭となり、四男友平が二宮四郎を呼んで、今の二宮町、当時の二宮の郷の地頭となつたのである。

土肥次郎実平は治承四年八月に起きた源頼朝孝兵の石橋山合戦の際に、一族を結集

して頼朝を援け、戦は散々の敗北となったが、主君を九死一生の中から救い出した第一の功臣で、以来頼朝股肱の臣として鎌倉幕府にても諸將の大長老として隠然たる力を持っておった。また、この戦の後に嫡男の遠平が、小早川弥太郎と名乗って父と別れて早川の庄(今の小田原地方)を領治することになったので、実平を中心として結合された相模中村氏一党は相模川以西の西相一帯に牢固たる勢力を張るに至ったのである。

千葉流の下総平氏の一族であった曾我祐信は、この中村氏一党の中に挟まれていたが、余綾台地の山陽一帯の要地を領して盤踞し、これらの諸家と提携して恰かも、その一党の如き顔呈しておった。

中村氏諸家、特に土肥氏と伊豆伊東氏との関係は深い血縁をもって強く結び合っていた。

土肥実平の妹は伊東祐親の妻であって、この夫妻の間の嫡男が河津三郎祐泰であるから、実平の妹は曾我兄弟の父方の祖母であった。また祐親の娘(祐泰の妹)が、実平の嫡男小早川弥太郎の妻となったのであるから遠平夫人は曾我兄弟の伯母であった。「曾我物語」の中に、早川の伯母御前と記されて、兄弟が折節訪れているのは、この夫人であった。

遠平夫人はもと、兄弟が父の仇とねらう工藤左衛門尉祐経の夫人であった。伊東祐親は初め、自分の娘を祐経に嫁せしめ、夫妻を京都に上落させて平家に仕えさせておき、その留守中に、祐経が父祐経から相伝されるべき、伊東、宇佐見、久須見の三庄を奪ったので、祐経が伊豆に帰った後、これを取り戻そうとして両者確執となったから、祐親大いに怒り、祐経から自分の娘を奪い返し、更にこれを小早川遠平に娶合せたのであって、このような因縁付の女性であった。

また曾我兄弟の異父の姉が、実平の第二宮四郎友平の嫡男二宮太郎朝忠夫人となつたことは前述したところであり、二宮の姉御前、または渡美の姉御前として、「曾我物語」の中に、属々あらわれることも既に記しておいた。土肥実平一族と曾我兄弟とは以上のような血縁でつながれておいて、兄弟にとっては背後の最も大きな陰の助勢者であり加護者であったのである。

若し曾我兄弟が、誕生の地の河津の庄か、さなくとも父祖の地伊豆国に永く住んでいたならば、恐らく仇討の本懐を達することはむづかしかつたであろう。それと云うのは兄弟の祖父伊東祐親は一時伊豆の三庄を領有して勢を振い、源頼朝に対しても初めはこれを援助する立場に立っており、安元二年十月の伊豆の奥野の狩倉も、永年伊豆の流人となつている源家の嫡流兵衛佐頼朝を慰めるために、祐親が土肥実平、大庭景義などと相計り一千人の将兵を集めて催したものであったが、狩の終了直後に嫡男祐泰が非業の最後を遂げる赤沢山麓八幡野の事件が突発したのである。そこで大いに悲歎して剃髪し入道祐親と言われるようになったのであるが、この頃から万事調子が

悪くなり、殊に、頼朝が祐親を頼んでその家に入入している間に、娘の八重姫(祐泰並に小早川遠平夫人、三浦義澄夫人の妹)と通じて一児を生ませたのを怒って、その幼児を轟が淵に沈め、頼朝を追ったので、頼朝は北条氏に頼むことになった。祐親はこれから源家に怨み結び、石橋山合戦の起きた際に、娘の嫁いでいる土肥氏はもとより、工藤家も狩野家も一族皆頼朝の旗擧げに馳せ参じたのに、ひとり平家方に付いて終始頼朝に対抗したので、後に捕えられて女婿三浦義澄のもとに預けられ自害したのである。

曾我兄弟からすれば、父は殺され、祖父は自害し、頼む父の弟伊東九郎祐清は高塚の人として誇れが高かったが、この人は頼朝の招きを辞退して京に上り、父の精神に殉ずるとして平家に仕え、北陸道の戦に討死するという有様で伊東家は全く沈淪した。それに反して、工藤祐経は頼朝の寵臣となって立身し、問題の三庄も手中に取め伊豆に勢力を張ったのであるから、曾我兄弟が伊豆の奥地に任んだのでは、孤立無援であるばかりでなく明日の生命と雖も保し難いかもしれなかった。母の万劫御前が、幼少の二児をとまなび、曾我祐信に嫁したために、早くより小田原地方に住むことになったのは不幸中の幸いであった。養父祐信は慈愛深き男であって、実子同様別け隔てなく一万と箱玉をいづくし育ててくれた。そして土肥氏一党と協力して陰に陽に兄弟を護ってくれたのである。小田原地方は伊豆と鎌倉の中間の地で、この間を往来する仇祐経の動静を探知するに最も適したところであったし、また土肥、土屋、二宮、中村の同族の絶対勢力地帯で、工藤祐経の力が喰い込む余地のないところである。曾我兄弟は、この地の中央に、これらの血縁の家々に庇護されながら成人しつつ、仇討計画を進めて行ったのであった。

八、再び曾我兄弟をめぐる人々を見る

曾我兄弟は父方も母方も名家であるから身寄縁者に有力な人物が甚だ多かった。前記の人々の外に、名のある血縁の濃い人々を挙げて見ると、後に鎌倉幕府の執権となつた北条時政の夫人と三浦半島の豪族三浦介義澄の夫人とは、ともに兄弟の父祐泰の妹であるから、十郎、五郎の伯母であった。

北条時政夫人の生んだ子が男子は二代執権義時となり、女子あまたある中に、一人が将軍頼朝夫人の政子であり、他の二人が畠山次郎重忠夫人、稲毛三郎重成夫人になつたので、これらの三夫人は兄弟の父の姪に当るのである。

母方の方では、岡崎四郎義実の後室は母の姉であり、和田左衛門尉義盛の夫人は母の妹であるから、これも兄弟の伯母の家であった。

工藤祐経は、曾我兄弟が幼少の頃から自分を父の仇として復讐をしようとしておらつて居ることは早くから知っておったが、彼の権勢を以てしても、この二人の一見孤立的に見える少青年の処置をすることが出来ずに十数年を過して終つており、そして

最後に兄弟の計画に負けて、命を取られたのである。幾度か兄弟を葬り去ろうと計るが、その度毎に必ず他の勢力にはばまれて失敗しておるのである。兄弟の最大の危機は兄十一才、弟九才の時のことで、工藤祐経は頼朝が伊東祐親をにくんでいるのを知って、兄弟が將軍家をも害さんと計っているように申し立てて、二兄を殺そうとしたから、頼朝は、曾我祐信を論じて梶原景時をして鎌倉まで護送させ、由比浜で処刑しようとしたが、畠山重忠、和田義盛などの嘆願によって赦されて、兄弟は危く死を免がれたような事さえあった。しかし、結局において工藤祐経がどうすることも出来なかったのは、前途のような兄弟血縁の人々が隠れたる背後の力として存在していたからであって、これらの助勢者は、或は連絡的に、或は孤立的な方法で、兄弟を保護し且つ便宜を計っていたものに違いない。

ここにもう一つ、曾我兄弟の仇討をめぐって、偲んでいる重大な問題がある。一体、曾我兄弟に仇とねらわれた工藤祐経は、どんな人物であったのかというに、彼は決して一介の武弁ではなかった。武骨一点ばりの武将でもなく、また純情な典型的な鎌倉武士でもなかったようである。武功だけであつたことは、平家滅亡後に頼朝から褒賞されていることでもわかるが、武功だけで出世をした男ではなく、むしろ才氣の勝った融通のきく文官肌の風流を心得えた武人であつた。これは彼が若い頃永い間平家に仕えて京都にいて都武士や京紳と交つた影響であらう。頼朝の側近に侍して重宝がられていたが、それは皇室や京都公卿達の來客の接待や、公の儀式などの運営のすぐれているを買っていたようである。「吾妻鏡」の記事を見ると、平重衡が頼朝を鎌倉に訪問したときの宴席の歌舞や静御前が鶴岡八幡宮で舞つた際に、祐経が鼓

郷土の学者

中垣謙斎を偲ぶ (四)

蓑田長平

その他当時の状況を記せる 賛するものなし。公(忠礼)の十余種あるも何れも大()の云われるよう、今にして同小異である。旧藩士早川()之を改めよとは余を殺す某氏の記録には「秀実の勤()ものなりとまで申さる。秀()子の御身、万一大久保家の王説に對し列座の歴々之に()実の曰く、恐れながら此時()興亡に関する様の次第に立

を打ち歌謡を誦して優れた技量を示したことが記されているので、祐経が風流芸能のたしなみの深かったことがわかるのであるが、こうした彼の風格は、武骨一筋に生き、千軍万馬の経験を得て、武功だけで立身した武將達からは、心よい存在でなかつたらしく、盛んに政策を弄して評判のよくなかつた梶原景時でさえも、祐経を敬慕していた程であつた。当時の鎌倉幕府の諸將達の間に、所謂武弁派、武断派といふべきものと文芸派、文治派とも言うべきグループが次第にともされつつあつて、互に反目しあつたが、工藤祐経は当然文治派の有力な人物であつたから、これが曾我兄弟の問題と結ばれて、兄弟を助けて祐経を葬ろうとする動きが明暗のうちに行われていたようである。

そこへまた、北条時政の別な動きがあつた。建久元年九月七日に、曾我兄弟が時政の館に身を投じて援助を求めているが、時政これを納れて、即日五郎の烏帽子親となつて元服せしめ、自分の諱の一字まで与えているが、「吾妻鏡」が、特にこの五郎元服の件をことあげて記していることを従来の史家は問題としていたのである。北条義時は幕府の実権を一家に掌握するために、巧妙にして深刻な種々な謀策を講じているが工藤祐経が君寵を受けて権勢を振っているのは、機会をとらえて葬ろうと考えていたであらう。それが時政の曾我兄弟援助となつたのであると思ふ。右のような次第で、兄弟の周囲にあつた人々を挙げていくと、勿論純粋な意味で兄弟に同情をよせて、陰になり日向になつて援助した人々もあつたが、他面には内容がなかなか複雑であつたようだ。ただ、この中において、十郎と五郎だけは、ひとえに父の仇を報ずるといふ義心一筋に突進を続けて行つたのであつた。(つづく)

至らば、何共相済み申さぬ 遊撃隊脱徒は二十四日よりとまで申上げたれども決するに至らず、時に志谷太膳()病を推して登城()秀実の説に従はれる機巧()に申上げ、茲に初めて賛成()者を得て事漸く決せり云々()と記されている。当日は()非常の激論を戦わし、秀実()は既に死を決していたに相()違ないと思はれるのである()謙斎秀実の至誠天に通じ()て、藩論を覆えし急転直下()する意向を示し、藩に於て()

は之に對し陳弁これ努め必 競渡辺了叟・吉野大炊介等 の策謀に依るものとして、 六月五日了叟・大炊介の外 早川矢柄(家老格) 関小左 三門(用人)を首謀者として 江戸表へ差出すべきこと 沙 次があり、同十月綱乗物に 下參謀軍監及び因州・長州 日家老岩頼進正啓は責任を 感じて一書を殘し潔く自尽 している。

その他小泉彦藏・山田竜

兵衛は土州藩士斬首の廉に
より鈴木森に於て斬首せら
れ、大年寄杉浦等はお役御
免となり、渡辺以下一先ず
藩にお預けとなり、渡辺了
斐は一切の責任を負い検視
立会い切腹仰付けられた。

九月二十七日忠礼侯は永
ちつきよ
居申付けられ、十月二日
大久保岩丸(十一歳)七万
五千石として相続大久保家
は取立てられて落着を見る
に到った。

謙斎はその功により明治
元年十月小田原藩少参事に
被任同十二月練二百石を加
増されている。

あとがき

以上私は瀬戸秀兄著「増
正五位中垣秀実伝」を主と
しその他小田原藩監察日記
及び個人の記録等を渉猟し
て、大要を記載したるに過
ぎない。従て意の尽される
ところも多く、勢い疎漏の
点も免れないと思う。この
点については識者のご是正
を仰ぐことを得ば幸甚であ
る。

終りに私は感想二三を述
べて閉筆したいと思う。
按ずるに小田原藩に於て
は正義派は一人の中垣謙斎

秀実のみでなく、他にも大
義名分を弁えた重臣もあつ
たと思うが、反論に押切ら
れて佐幕に統一され、己む
を得ず之に従ったと思う。

要するに死を以て争うほど
の勇氣ある者なく、日和見
的で首鼠兩端の醜状を曝ら
し、賊徒からも軽侮される
態度を取ったことは甚遺憾
に思ふ。既に賊徒が箱根関
門に迫ったときから藩軍は
統一されていない。この時
から両派に別れていたと思
われるのは一方防禦に努め
ながら他方賊徒の声威に押
されて降参などと叫んでこ
れに接近したことである。

賊徒は藩の甘さを見て組み
しやすしとして城下に押し
かけ諒弁を振って家老等を
説伏せられたものと思ふ。

藩主忠礼侯は暗愚の君で
はない。藩論に押されたの
は、賊徒と手を結んだもの、
誰か藩論を覆す有力者を待
ち構えて居られたものでは
あるまいか。謙斎が強諫の際
容易に聴かれなかったのは
家老以下悉く佐幕派にして
その勢力強大なる折柄、僅
に目付役である一人の反対
によつて意思を枉げること
は出来なかつたのであろう
幸に他に有力な賛成者が現

われたので、我意を得たり
として藩論を覆されたもの
と見るのが正当ではあるま
いか。

官軍の軍監中井範五郎を
殺害したのは遊撃隊の所為
として朝廷の査問に答弁せ
るも、事實は藩軍によつて
なされたものと思われるの
は、賊徒側の記録にはこの
事について一言も触れてい
ないのを見て分るのである
朝廷に於かれては大久保
藩の行動を痛く憎み、嚴罰
に処し家祿も召し上げる決
定であつたのを征討大総督
参謀西郷隆盛の極力取做し
によつて緩大の処置を見る
に至つたと聞いている。薩
摩藩島津侯は大久保侯とは
前に姻戚の関係があつたの
である。

今筆を閉くに当り、明治
維新当時と現在とを比較し
て時勢の著しき変遷に驚か
されるのである。今日民主
国家となつて國民の思想も
大分変化を来したものの我
々は既往の歴史を跋外する
ことは出来ない。明治維新
当時の小田原の史蹟と儀表
的偉人を偲んで、反省と修
養に資することは今日の最
喫緊事と思料敢て秃筆を揮
つたことを潔とせられたい
のである。(終)

如くしてさしも心配した事
件も流溜か下る思い、それ
にしても私が如き若者の御
願を真剣に取り入れて善処
して頂いた偉大な政治家森
格先生には最大の敬意を表
はしたい、先生とは此の事
件以来時折御目に掛る機会
を得て可愛がって貰つた。
或時等は御子息の新ちゃん
(陸軍幼年学校生徒)と共に
ホテルの食堂で御馳走に
なつたり又千駄ヶ谷の御自
宅に呼ばれて家族的に御招
待を受けたりました。

先生に關しては天下の皆様
も充分御承知の通りであり
ましようがここで一つ世間
にはほとんど知られていな
い秘事を御披露しましょう
それは森さんが三井物産上
海支店に勤務して居られ明
治三十七年即ち日露戦争の
起きた寸前の時であつた日
直で会社に居ると一通のウ
ナ電がニューヨーク支店か
ら届いた急ぎ開いて見ると
日本とロシアとの間に険悪

な空気が溢れ遂にロシアが
開戦の布告をしたと言う。
実に重大事件のニュースで
あつた。そこで英敏な頭の
先生は考へるにこれは只事
ではない。「会計の爲めに
金もうけをしよう」と日曜
日の事として上司に報告す
る余裕もないので独断で
一か八かやつつけると言う
訳で早速支那の大商人で多
さんの船を持って居る人の
家を尋ねる事となつた処が
先方は一介の社員位では面
会しない、それに夜分でも
あるのでどうしても会つて
れないと言うそれなら当方
も引き下る訳にはいかぬ。
会う迄は女關先でハンスト
を決め込む迄だと、とうと
う先方は我を折り十分間面
会する約束で室内に招じ入
れられました。

「あなたの所有して居られ
る船を全部チャーターさせ
て下さい。そして今此処で
直ぐ契約をして欲しい」と
知れ様ものなら君も僕もク

随筆あれこれ

会社乗取り騒動の巻(五)

井 上 生

したので先方は眼を白黒す
るばかり。「この様な重大
な事なら明日君の会社の重
役と致しましょう。今と言
われても出来ません」「私
を信じて頂けないのですか
?大丈夫ですよ、僕とて三
井の大番頭です。決して御
迷惑はかけませんから信じ
て下さい」「一体何んでそ
うか?又今晩でも船が必要で
しょうがね」「イヤ何でも
今直ぐ契約して頂くのが必
要です。明日になれば必ず
重役から御話をさせます」と
と言つた調子で遂に先方は
その押しに負けて承認をし
契約を取り交はしたと言
うのである。上司とは支店長
の山本条太郎重役は益田孝
男爵であつた明日になり昨
夜の事を早速詳細に山本支
店長に報告した。すると支
店長の顔は蒼白となり「君
は偉い事をしてくれたね、
それは大変な事だ上重役に
知れ様ものなら君も僕もク

「問題だぞ、一厄の事務員のかせに独断で事を運ぶなんてあまりにも大それた事だ」とおろおろし出した。「支店長！責任は総て僕にあるのです。決して支店長に御迷惑を掛けたくはありません。どうぞ御安心下さい。これから益田重役にお話をします。」

ふところに辞表を持って我が啓すべき森さんは重役に面会して今迄の出来事を委細に報告して自分の考へ方を申し上げたのであった。そして「私を会社から辞めさせて下さい。」と聞き入って森青年の顔を見つめて居られた益田重役は大いに驚き且つ此の男の感の鋭さに感心してか一言もないが、只黙してウナずくのみである。

翌朝会社に出勤すると支店長が待ち受けていて、「森君一寸来てくれ給へ、昨日君が重役に会った後に僕が呼ばれたのだ。覚悟はして居ても何だかいやな思いで重役室に入って行く」と山本君、君はいい部下を持って幸せだね。会社も幸福だよ。然し会社には厳しい規則があつて如何なる事も上司の命を受けて初めて行

動が出来る事になつてゐるものだが森は型破りをしてくれた。会社には大いに利益をしてくれただけで規律を乱す訳にはいかぬ。だから処置は君に任すから宜敷くやってくれ給へ」と言う具合で僕もうれしいが実は困つてゐる処だよ。此の事件の結末御想像の通り、後になり三井物産の大立物となられた事を思へば御判りと思ひます。

実は本年一月豆相史談会終会が熱海で開催されました。従来の会長の松坂屋（声の湯）の御主人松坂康氏が辞められ新たに熱海の紅葉館の主人が推薦されました。私は副会長を留任と決りました。其の席上内田氏から明治三十七年頃の話を聞き、東郷元帥と森格氏との関係があると言ふのです。それは今日に至る迄誰一人として真実を裏付してくれて居る者が無いので残念だと言つて居られた。其の謎の話というのは次の如し。

内田氏曰く私は東郷元帥に常に御懇意に願つて居りました。或る日元帥がこんな事を話された。それは日露開戦となるヤロシヤのバルチック艦隊がどの方面を

通過するかを我が日本海軍としては早く知りたい。それを知れば我全艦隊を導引して敵に当らせる計画も出来る。迷つてゐた時突所として無電が入つて来て「敵の艦隊はウラジオストックに向つて、今しも日本海を通過中」というのである。喜こんだ元帥は「有り難う君は誰だね？」と尋ねると森格だと答へた。この様な訳で敵を全滅せしめる事に成功したのは森格の御蔭だと今でもそれを感謝してゐるんだ」との話を私は「内田氏」直かに閣下から聞いてゐるんですから井上さん其の裏付が欲しいのです。と会長は語られました。

私はそれでは森先生の御遺族の方榮枝未亡人が未だ御存命ですから東京の成城町の御宅へ行つて聞きましよう。という訳で其の後未亡人に御会してよく尋ねました。すると「その様な事は私は全然知りません。貴方も御知りの通り森と言う人は如何なる事も口外しませぬものね」期待した裏付も出来ず甚だ残念、然し事によると先生とは格別実懇である。現在国鉄総裁をして

承知かも知りませぬのでは是非好機会を得て伺つて見る事にいたしました。以上述べて来たのは若かりし頃の森先生の人物の一端を評したに過ぎない。これを以て会社乗取騒動の巻を終ります。以上昭和三十七年七月七日（六十六回目の誕生日を迎へて）

只で年を

あてます

何歳だつていいじゃねえか他人の年を聞くなんて人を馬鹿にしてゐる。失礼だ！どこでも、誰れでも怒る言葉だ、物も言ひようで角が立つというが、つい先日編集室へやって来たひょうきんな某氏が「実は私は年齢をうらなひで、びしゃっと即答する法を發明したので貴紙を通じて世の人々に益したいと思つてね」と、満面に笑をはこぼせながら言つた。ほらも休み休みおっしゃい口の悪い連中の言葉を目に「偽だと思ふなら私をテストしてみなさい百発百中は請合ひだよ」偶々居合せた若い茶目公が「じゃあ俺の彼女は何才で何月生れたか言つてみる、

わかるもんか」と思ひ切つた発言に、某氏は笑いなから次のような要求をした。「私はお金を貰いたくつてゐるのではなくて、欲しいのは、その人の生れた月を二倍して五を加え、それを五十倍してその人の年齢を加えて三百六十五を引いた答を貰いたんだよ」

あつははあ、茶目君は笑つてゐる某氏に「馬鹿なことを言つてらあ年月を言わせて年月を答えるなんて近頃どうかしてゐるね？」と、浴びせかけられた某氏は呆然の態で、「君そうではないよ、例えば君の彼女の計算を別室でもどこでもよいから私にだけわからないうようにやったその集計だけを示して呉ればよいというわけさ、おわかりかね？」茶目君はとつとした面持で、当年二十三才で十月生

弔報

小田原史談会発足当初の薩みの親であつた、前郷土文化館主事の溝口伊將氏が、十月二十二日に急逝され翌日告別式がありました。突然のため事務局より代表して謹んで御霊前に供物をいたし哀悼の意を表しました。（會員現在三三六名）